

「日本一の福祉のまち」目指す 住民全員に役割と居場所を

(2013年6月19日発行「高齢者住宅新聞 行政トップインタビュー」より)

平成24年1月に単独市制施行し、愛知県で38番目の市として誕生した長久手市。初代市長の吉田一平氏は、雑木林の中に多種多様な施設が混在する、ユニークな多世代交流自然村「ゴジカラ村」の形成に長年取り組んできた。

平成25年4月の長久手市の総人口は5万1,943人。うち65歳以上人口が7,551人、それが2050年には2万177人と約3倍になると推計される。高齢化率は現在の14.7%から31.6%となる。

高齢化が加速する中、市長がかかげた目標は「日本一の福祉のまち」。ゴジカラ村の発想と智恵を市政に生かす。吉田市長の目指す理想の町とは。

■誰もが「必要とされる」町づくり

——超高齢社会における問題点は何だと思われますか。

地域社会の中で高齢者が「必要とされる」場所がないことが何よりの問題。会社を退職し、家でも地域でも必要とされず、近所の喫茶店で朝から珈琲片手に新聞を眺めているリタイア組をよくみかける。戦後50年、人口も経済も右肩上がりの中で日本は安全・快適・便利な町づくりをしてきた。安全・快適・便利な町には住民の役割が少ない。住民が自ら考えなければならないことも、ほとんどない。

私は長久手を住民主導の町にしたいと思っている。行政単位を小さくし住民全てに役割を持ってもらう。子供から高齢者まで誰もが「必要とされるまち」、それが「日本一の福祉のまち」と考える。

——それにはどんな仕組みが必要ですか。

長久手市には6つの小学校区があるが、各小学校区に力を持たせ、地域の事業は住民自身に提案・運営してもらい、市はその事業に予算をつける。今後増える団塊世代のリタイア組に役割を持ってもらうことが目的の一つだが、ボランティアではなく、お金を払って、きちんとした仕事をしてもらう。

各小学校区の仕組みはこれから住民とともに作る。これまでは計画や制度が先にあった。地域福祉計画などは山ほどあるが、住民はほとんど知らない。今後は計画を作るところから住民に関わってもらう。住民が集まり、ああでもないこうでもない、ワイワイやることが重要。

■新しい町の土壌を作る

——ゴジカラ村を作ったきっかけは？

誰でも施設が安全安心で一番だと思うでしょう。しかし、どんな優良な施設でも現在の

職員配置は2対1。例えば入居者80人の施設で職員が40人だとする。夜勤4人、夜勤明け4人、休み12人。すると昼間は20人。20人が8時間働くと介護労働時間は160時間。すると、一人の職員が一人の高齢者に関われる時間はせいぜい1日2時間。

どうしたら残り22時間、高齢者を一人にしないですむか。そんな発想で作り上げたのがゴジカラ村。

——どんな取り組みをしましたか。

施設の中に色んな居候を住ませた。動物も住ませた。地域の人も中に入れた。多くの施設は優秀な職員が何もかも世話をし、よそ者を排除して安全を確保する。そうした絶対に失敗を許さぬ仕組みが日本中にできている。しかし、どんなに優秀な職員がよい介護をしても2時間しかできないのが現実。プロのサービスではないもので、残りの22時間を見ていこうというのが包括ケア。雑多なものが混在するゴジカラ村は、その一つのカタチ。

——その取り組みを市に広げていく？

私は新しい町づくりに3つのフラッグ（旗印）を掲げている。

①一人ひとりに役割と居場所があるまち、②助けがなかったら生きていけない人は全力で守る、③ふるさとの風景をこどもたちに。

全ての事業はこの3つのフラッグをクリアして進める。そしてその事業は住民自身が考える。問題が山積みで不便な所には仕事と役割が生まれる。時間をかけ、困難なことを一緒に乗り越えることで地域の絆は深まる。「日本一の福祉のまち」とは、単に施設やサービスがいいということではなく、そこに暮らす人たちが支え合う「絆」で結ばれた町。私は今、その新しい町を築くための土壌を作っている。